

〈知的障害教育〉

衣服の着用と手入れの実践力を育む家庭科の指導の工夫

——問題解決的な学習と連携ツールの活用を通して——

沖縄県立美咲特別支援学校教諭 長 嶺 春 香

I テーマ設定の理由

近年グローバル化や情報化が進展する社会の中で、子供を取り巻く環境は大きく変化し、予測困難な時代となっている。『特別支援学校学習指導要領（平成29年告示）解説各教科編家庭分野』には「実際の生活と関連を図った問題解決的な学習を取り入れ、生徒同士や教師との対話及び体験活動を通して、自分の課題に気づいたり、課題解決や目標達成のために取り組むことについて考え、判断したり、表現したりできるようにすることが大切である。」と示されている。また、問題解決的な学習について鈴木真由子ら(2012)によると「家庭科では児童・生徒が生活における問題を発見し、生徒が主体的に解決できる力を身につけることを重視しており、これまで以上に問題解決的な学習が求められている」と述べられている。このようなことから目まぐるしく変化する予測困難な時代において生徒が主体的に解決できる力を身につけることは、今後の学習や生活の質的向上にも繋がり大きな意味を持つものであると考える。

沖縄県立美咲特別支援学校は、幼稚部から高等部までの幼児児童生徒が在籍している知的特別支援学校である。教育目標として「日常生活を豊かにする生活習慣を育てる」「自立、社会参加・貢献をめざし、必要な資質、能力、態度を育てる」等を掲げている。担当する家庭科においても主体的・実践的な学習を通して、「自分のことは自分でできる生徒」を目指し、自分や家族のためにも主体的に活動し、実生活に般化する力の育成に取り組んでいる。特別支援学校の家庭科に関しては、小学部では「生活科」の中で「お手伝い・仕事」等の項目で家庭に関する内容を取り扱い、中学部では「職業・家庭」として衣服分野では日常着の着用や手入れ、高等部では教科「家庭科」として、衣服の材料や状態に応じた日常着の手入れについて考え工夫をすることが示されており、発達段階に応じた学びが展開される。中学部段階で衣服の着用や手入れの基礎的なことが自分でできるということは、高等部の発展的な内容への土台作りとなり、将来の社会自立への大きな一歩となって、将来の生活が豊かなものになると考える。

本研究の対象生徒は中学部3年生6名で、教室に入れない生徒や自分の気持ちを伝えることが苦手な生徒もいるが、明るく活気のあるクラスである。家庭科の実態としては、気候に合わない服を選んだり、サイズの合わない服を着たり、洗濯をせずにお気に入りの服を着る等の衣生活の課題がある。これまでの自身の授業を振り返ると、教師と生徒のやり取りが中心の授業が多く、生徒同士の関わりや自分の考えや意見を伝える話す場面が少なかった。その要因として、教師の説明が中心になり、生徒自身が考え、解決に向けて課題に取り組む活動、振り返りの方法が不十分であったと考える。

そこで本研究では、問題解決的な学習の視点を取り入れた授業構成を行い、生徒が問いを持ち課題解決に向けた取り組みや生徒同士の関わりを大切に、実践的・体験的な活動も取り入れながら生徒が主体的に活動できるように指導を工夫する。また、授業で学習したワークシート、学習の様子を記載した家庭科便り、家庭で取り組む手伝いシート等の連携ツールを家庭に持たせることで、本人、保護者、学校で共通確認を図りたい。さらに、身近な人から承認されることで生徒の自信や意欲を育み、衣服の着用と手入れの実践力に繋げたい。個別の教育支援計画の中で「一人暮らしがしたい」「グループホームで生活したい」という願いがある生徒たちにとって、実生活に生かす力や生涯にわたって活用できる力が育成されることは、今後の学習や生活の質的向上にも繋がり大きな意味を持つものであると考え本テーマを設定した。

〈研究仮説〉

- 1 衣服の着用と手入れの学習において、問題解決的な学習を意図的・計画的に行い、課題解決を図る経験や体験的な学習を重ねることで、衣服の着用と手入れの実践力を育むことができるであろう。
- 2 本人、保護者、学校で共通確認することができる手伝いシートや家庭科便り等の連携ツールを活用することで、生徒が主体的に活動する場面が増え、身につけた力を実生活へ生かすことができるであろう。

Ⅱ 研究の内容

1 衣服の着用と手入れの実践力とは

『特別支援学校学習指導要領（平成29年告示）解説各教科等編中学部職業・家庭科』における1段階家庭分野の衣生活の内容に、「場に応じた日常着の着方や手入れの仕方などについて知り、実践しようとする事」「日常着の着方に気づき、工夫すること」と示されている。本研究は衣服の着方や洗濯等の学習を通して、衣生活の課題に対して考え、行動しようとする意欲や学校で学んだことを実生活で生かすことができる力を衣服の着用と手入れの実践力と捉える。

2 問題解決的な学習とは

問題解決的な学習とは、教育学者デューイより提唱された教育方法で、生徒が自ら問題を見つけ、その問題を自ら解決する能力を身につける学習方法のことある。問題解決的な学習を重視することが求められているのは、単に指導方法の改善事項としてだけではない。北俊夫(2015)によると「教師が知識を一方向的に伝達する授業ではなく、子どもたちがめあてをもって主体的に知識を習得・獲得していく授業、すなわち問題解決的な学習を展開すること」と示している。生徒が主体的に問題を解決していく学習過程でさまざまな資質や能力を育むことや問題解決の場面においての教師の役割や発問についても大切だとしている。本研究では、問題解決的な学習を意図的・計画的な授業を行い、実生活に即した課題について解決を図る経験や体験的な学習を重ね、主体的に解決できる力を身につけていく。

3 家庭科における学習過程について

『中学校学習指導要領(平成29年)解説技術・家庭科編』において、学習過程の参考例が示されている(図1)。生徒が身近な生活課題を主体的に捉え、具体的な実践を通して、課題の解決を目指したことを意図しており、生徒が課題を解決できた達成感や実践する喜びを味わい次の学習に主体的に取り組むことができるようにすることが大切である。また、家庭や地域との実践についても一連の学習過程としても位置づけられている。

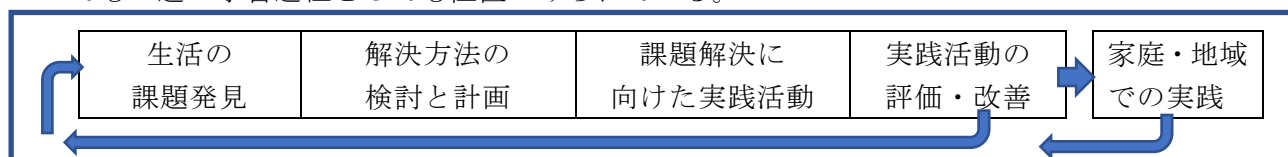


図1 家庭科、技術・家庭（家庭分野）の学習過程の参考例（一部抜粋）

表1 学習過程における視点 『家庭科、技術・家庭の学習過程の参考例』を基に作成

生活の課題発見	既習の知識・技能や生活体験を見つめ、生活の中から問題を見出し、解決すべき課題を設定する
解決方法の検討と計画	生活に関わる知識・技能を習得し、解決方法を検討し、解決の見通しを持って計画を立てる際、生活課題について自分の生活経験と関連づけ、様々な解決方法を考える
課題解決に向けた実践	学習した知識・技能を活用し、衣服実習や調査、交流活動を通して、課題解決に向けて実践する
実践活動の評価・改善	実践した結果等を振り返り、考えたことを発表し合い他者からの意見を踏まえて、改善方法を考えるなど実践方法の評価・改善する
家庭・地域での実践	改善策を家庭・地域で実践する

本研究の問題解決的な学習の取り組みでは、学習過程の視点を（表１）のように整理した。この学習過程に、「職業・家庭」の家庭分野で育成を目指す資質・能力の３つの柱を位置づける（図２）。知的障害のある生徒の発達段階や障害の特性を踏まえ、視覚教材の工夫や実践的・体験的な活動を通して実感を伴って理解できるよう学習を工夫していく。このような問題解決的な学習を展開する中で、生徒が解決できた達成感や実践する喜びを味わい、学校で学んだことを家庭でも実践することができるよう、家庭とも連携を図り実生活で活用する力が育つと考える。

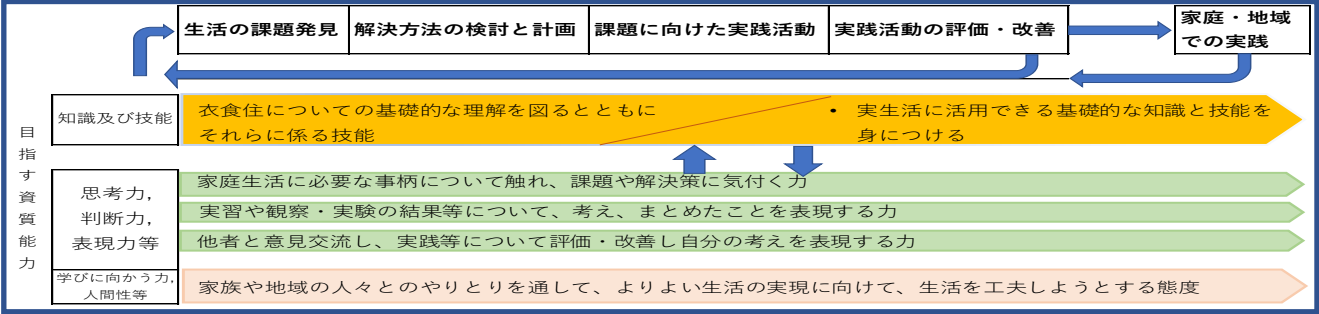


図2 学習過程と家庭分野で育成を目指す資質と能力

4 振り返りシートの工夫について

授業を通して、何ができて何ができなかったのか、新たな気づきがあったのかなど生徒自身が自覚をするためにも振り返りの活動を充実させることは大切である。『「問い」が生まれるサポートガイド(2022)』（以下、『問いサポ』）では、振り返りの意義について「解決方法や学んだことに自信をもったり、曖昧な点が明確になったりする」「考え方や知識・技能等の学習内容の定着が図られる」等を記している。また、『問いサポ』の振り返りの視点（表2）の項目を参考にし、生徒へ提示をしていく。本研究対象生徒の中には、文字を書くことに時間を要する生徒や漢字が苦手な生徒もいるため、振り返りシートは書く文字の量を調整するなど個別に作成し、工夫を行う。

表2 振り返りの視点（『問いサポの引用』）

習得	学びの変容を振り返る	「〇〇が分かった」
	学びの過程や結果を振り返る	「〇〇することができるようになった」
	交流を振り返る	「〇〇な考え方もあるんだ」
活用研究	次につなげる	「〇〇でもできるかやってみよう」

5 連携ツールとは

本研究で取り組む連携ツールは、富山大学付属特別支援学校で活用されている交換記録ツールを参考にした。本人、保護者、学校と共通確認を図ることができるツールで、授業で学習したワークシートや授業の様子を記載した家庭科便り、生徒が家庭で取り組む手伝いシート等が綴られているファイルである。連携ツールを家庭に持ち帰り学校での取り組みを保護者と情報共有し、取り組みが認められ褒められる場を設けることにより、生徒の自信や意欲を育むことをねらいとしたツールである。小林(2005)は、「プラス結果を得ることによって身についた行動は、一度習得されると継続するものである。活動で成功する機会を増やし、自分で嬉しいと感じることやうまくできたことを周りから褒めてもらうプラス結果と支援ツールは本人のやる気を高める」と述べている。本研究では連携ツールとプラス結果を合わせた取り組みを家庭と連携することで、保護者や生徒が家庭で衣服の手入れについて確認することができ、家でも自分のできることからやってみようという意欲へと繋がり、実生活で生かすことができるものとする。

Ⅲ 指導の実際

1 生徒の実態

本研究の対象生徒は中学部3年生6名で、学習面は小学校2年生程度の漢字が読める生徒から平仮名が少し読める生徒など幅広く、コミュニケーション面では日常の簡単なやりとりできる生徒や自分の気持ちを適切に相手に伝えることが苦手な生徒、集団が苦手な生徒がいる。

対象生徒の衣服の着用と手入れに関する実態は保護者アンケートと11月の授業で実態把握を行った(表3)。衣服の手入れに関しては、「洗濯機を操作することができる」「液体洗剤を目盛りまで計量することができる」「干すことができる」項目は経験が少ないこともあり、教師の支援を必要とすることが多かった。「手洗いをすることができる」や「たたむことができる」に関しては、学校生活でも経験する機会が多いこともあり教師の言葉かけでできることが分かった。

11月に実施した生徒アンケートから「家庭での手伝いの取り組み状況」は全ての項目において、2名ずつであった。手伝いの内容は、自分でできることを中心に取り組んでいることが分かる(図3)。「子供にとって手伝いは必要だと思いますか」の項目では全保護者が必要だと答え、「手伝いを通して子供に身につけてほしいことはありますか」の回答で多かったのは「助け合いの気持ち」「自信」「責任感」ということが分かった(図4)。このことから、連携ツールを通して授業の様子を伝えたり、手伝いシートを活用したりすることにより、生徒自身の頑張りを認める機会を増やし意欲に繋げ、学校で学んだことを家庭でもできるように実践力を高めていく。

表3 衣服の着用と手入れのチェックリスト

		A	B	C	D	E	F
		11月	11月	11月	11月	11月	11月
着用	1自分の服のサイズが分かり、服を選ぶことができる	○	○	◎	○	△	△
	2洗濯機を操作することができる	△	△	△	△	△	△
衣服の手入れ	3液体洗剤を目盛りまで計量することができる	△	△	○	△	△	△
	4手洗いをすることができる	○	○	○	○	○	○
	5干すことができる (タオル・ズボン・Tシャツ)	○	○	○	△	○	△
	6たたむことができる (タオル・ズボン・Tシャツ)	○	◎	◎	○	○	○
		◎一人でできる ○ツールや言葉の指示を受けてできる △教師の支援を受けてできる					

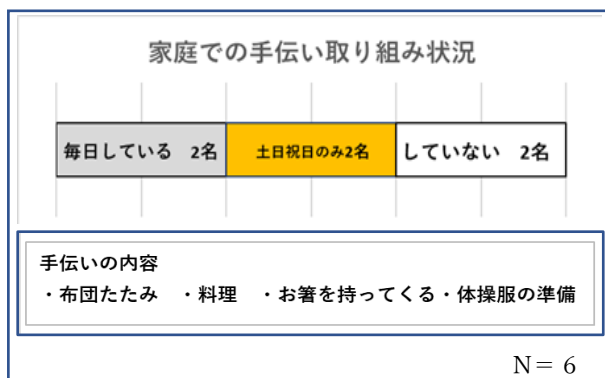


図3 生徒アンケートより

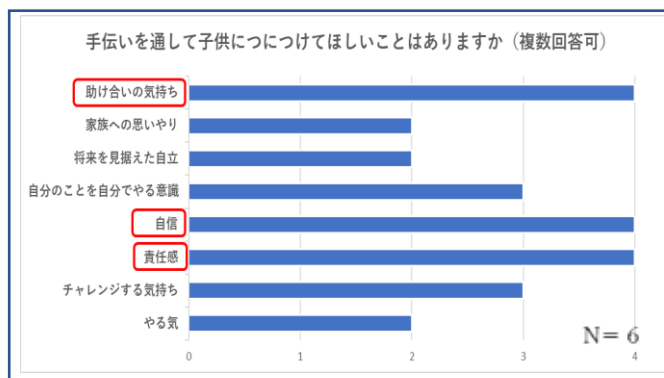


図4 保護者アンケートより

2 授業実践

(1) 単元名「衣服の着用と手入れ」

(2) 単元目標

- ① 生活との関りが分かり、目的に応じた着用、個性を生かす着用及び衣服の適切な選択について理解すること。
- ② 衣服の必要性、衣服材料や状態に応じた日常着の手入れについて理解し適切にできること。

(3) 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
- 衣服の役割や目的に合わせた衣服を理解している。 - 衣服の手入れの必要性が分かり、基本的な手入れを身につけようとしている。	生活の中から課題を設定し、解決策を考えて、実践的・体験的な活動を通して課題を解決しようとしている。	実践的・体験的な活動の中で、よりよい衣服の着用と手入れについて考え、主体的に取り組もうとしている。

(4) 単元の計画（全16時間）

	学習内容	知・技	思・判・表	態度
生活の課題発見 （1時間）	人間が衣服を着用する意義が分かる 目的に合った衣服の特徴を知り、選択ができる	○	○	
解決方法の検討と計画 （1時間）	衣服の手入れの必要性和洗濯方法について 衣服の手入れにはどんなものがあるか	○	○	○
課題解決に向けた実践活動 （12時間）	手洗いの方法と効果について 「靴下洗いと食品のシミよくおちる洗剤」	○	○	○
	洗剤と汚れの落ち方について	○	○	
	衣服を干す道具について調べる（宿題発表）	○	○	○
	衣服の基本的な干し方・たたみ方について	○	○	
実践活動の評価・改善 （2時間）	自分の服のサイズ・おしゅれについて		○	○
	調べたこと・実践して分かったことをまとめて発表しよう		○	○
評価方法は行動観察：ワークシート・振り返りシートにて毎時間行う				

(5) 検証授業検証「衣服の干し方」【13/16時間】

① 目標

- ア 衣服を干す意義や衣服の基本的な干し方が分かる。
- イ 級友と協力して考えて、衣服を干すことができる。
- ウ 衣服の干し方の違いに気づき、家庭でもできそうな取り組みについて考える。

(6) 本時の展開

学習活動	生徒の様子	【評価規準】 （評価方法）
1前時の学習内容の振り返える。 2本時の学習内容・目標が分かる。	・写真を見て前時の授業を思い出す。 ・学習目標を確認する。	【評価規準】 （評価方法）
「失敗しちゃった」 シワシワの服どうしたらきれいになるかな 3干す時に失敗した衣服をどうしたらきれいになるのか、生徒一人一人考える。 ☆生徒の反応(予想) ・ぐじゃぐじゃだね。 ・きれいに干してないね。 ・パンパンしたらいいんじゃない。 4グループで衣服をどうしたらきれいになるのか対話しながら解決方法を考え、実践を行う。 5衣服を干す実践を通して気づいたことや工夫したことを模造紙にまとめ、発表する。 6他のグループの発表を聞き、実践内容を確認する。	・具体物を見て問題に気づき、考える。  ・解決方法を考えて、実践、わかったことをまとめて発表する。 	【知識・技能】 【思考・判断・表現】問題を解決しようとしている。（生徒観察・模造紙） 【思考・判断・表現】 実践結果を級友と対話し、模造紙まとめて発表している。（生徒観察・模造紙） 【主体的に取り組む態度】 他者の発表を聞き、情報を整理して、それらを実生活に生かそうとしている。（ワークシート・振り返りシート）
7振り返りシートを記入する。 8本時の授業を振り返り、実践で分かったことや感想を発表する。 9家庭で取り組んだ手伝いを発表する。 10級友の発表を聞き、手伝いについて考える。 11次時の見通しを持つ。	・振り返りシートをまとめる。 	
今日の発見きり★気づいたこと みんなヤケがたがうらんだ など思いました。 今日の発見きり★気づいたこと シワのいびと かたぐくをあける ことです。		

(7) ワークシートや掲示物について

ワークシートは生徒の実態に合わせて3種類作成したことで、生徒が自らシートを選択し一人で取り組む姿が見られた(図5)。

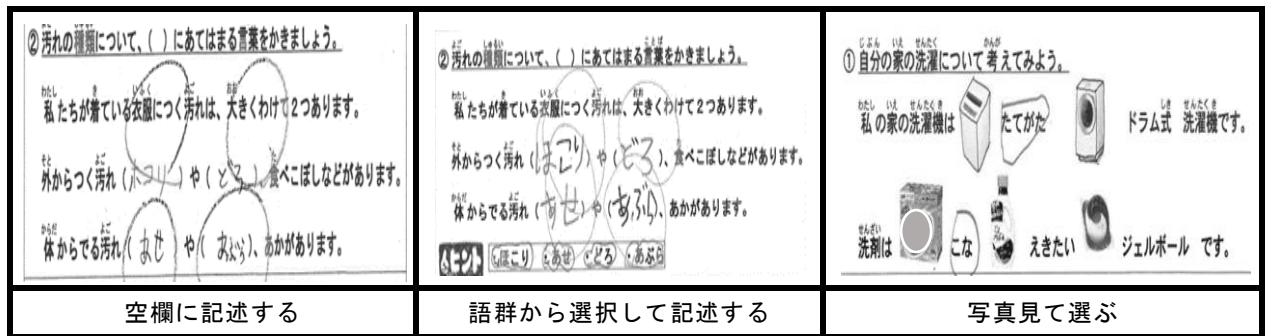


図5 3種類のワークシート

題材に応じて、模造紙に解決方法、学習のまとめをすることに挑戦した。生徒が取り組みやいように付箋紙を活用してお互いの考えをまとめ、実践で分かったことや気づいたことを記載し、発表することができた。作成した掲示物を時系列に廊下に掲示し生徒がいつでも学習の振り返りが確認できるようした(図6)。



図6 掲示物で振り返る様子

(8) 連携ツールの活用

授業の最後には、連携ツールの一つである手伝いシートの発表を行った。また、家庭で実践した手伝いをカードに記入して「手伝いの木」に掲示した(図7)。級友の発表を聞いたり、カードを見たりして、「自分も挑戦してみたい」など新たな手伝いに興味を持つ姿が見られた。



図7 手伝いの木を見る様子

IV 仮説の検証

仮説1 衣服の着用と手入れの学習において、問題解決的な学習を意図的・計画的に行い、課題解決を図る経験や体験的な学習を重ねることで、衣服の着用と手入れの実践力を育むことができるであろう。

1 問題解決的な学習の効果について

(1) 授業実践における考察

① 生活の課題発見

人と動物のイラストを比較し、違いや気づいたことについてペアで話し合いを行った。生徒の気づきや発見の言葉の中から「人はどうして服を着ているのか」と問いかけた。すると、「肌を守るため」「裸はだめ」などの考えや「なぜ人はネクタイをしているのか」とより発展的な質問もあり、衣服に関する関心へと深まった。また、衣服について「お友達と遊びに行く時、外出する時に役立つ」と衣服の必要性を伝える生徒もあり、衣服の着用について「知りたい」手入れについて「やってみたい」と課題を発見することもできた(図8)。



図8 対話し考える様子

② 解決方法の検討と計画

衣服の着用と手入れにはどのような手順があるかを今までの経験から振り返り、自分の考えを伝え、級友の考えを聞く姿が見られた。皆で考えをまとめ手順を確認することができた。

③ 課題解決に向けた実践活動

ミートソースのシミやシワになった衣服など生活の中から身近な題材を取り上げ、具体物を提示して課題を解決する方法を1人で考える時間とペアやグループで考える時間を設定した。教師の言葉かけや支援を最小限にすることをティームティーチングの教師と確認し、生徒同士でお互いの考えを対話する時間を大切にすることで、話すことが苦手な生徒も自分の考えを伝えることができるようになった。意見が1つにまとまらない時は、問いのシートを2つに分けてお互いの考えを尊重して工夫する生徒の姿も見られた。また、家庭により衣服の手入れ方法が異なるので、各家庭で使用している洗剤や干す道具、干し方、たたみ方の調べ学習を行った(図9)。それに基づいて道具を準備し環境を整え、実生活に近い形で実践したことが衣服の手入れの実践力に繋がった。

他の家庭とも比較することで様々な手入れ方法の情報共有もすることもできた。実践では級友の活動を真似てブラシや洗濯板を使い思考錯誤する姿(図10)や衣服を干す母親を思い出しながらシワを伸ばす手立てに気づき、生徒同士で教え合う姿など様々な解決方法を発見することができた(図11)。知的障害のある生徒にとって実生活に即した実践は解決方法をイメージしやすく、生徒同士の関わりから知恵を出し合い解決をする体験的な活動を積み重ねたことは、解決方法の実践において効果的だったと考える。

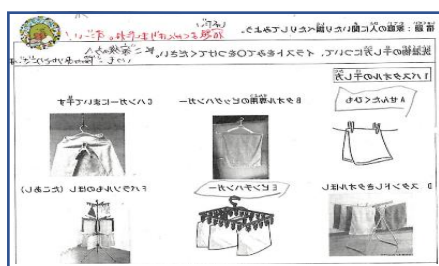


図9 洗濯方法の調べ学習（宿題）



図10 洗濯板で手洗いする様子



図11 生徒同士で教え合う様子

④ 実践活動の評価・改善

授業の最後にワークシートや振り返りシートを使い、課題解決に向けての実践方法や分かったことをまとめて発表した。1人では発表が難しい生徒も級友が側にいることで安心して発表することができた。『問いサボ』の視点でまとめた生徒の振り返り(表4)を見ても分かるように、授業で学んだことや実践してわかったことを記入している生徒、各家庭の手入れ方法や違いを知ることができた生徒、級友との交流が楽しかったと振り返る生徒もいた。活用研究の項目では、衣服の着用で自分に合った衣服選びの注意点に気づくことができ、今後の衣服選びについて具体的に述べる等、次に繋がるような振り返りが見られた。

表4 『問いサボ』の視点でまとめた生徒の振り返り

		生徒の振り返りシートより（一部抜粋）
習 得	学びの変容を振り返る	「服は生活に必要。冬は体をあたためて、夏は汗を取る」 「汚れの落ち方が違う」(洗剤の種類) 「手洗い40どのお湯でよくおちた」 「裏返す。パンパンたたく」(衣服を干す)
	学びの過程や結果を振り返る	「液体洗剤が使いやすくて気に入った」 「パンパンしたことで伸ばすことができた」(干し方) 「シワと伸ばすと間隔をあけるができた」
	交流を振り返る	「みんなやり方が違うんだと思いました」(干し方) 「たのしかった。〇〇さんありがとう」(服の選択)
活用研究	次につなげる	「かゆくない服を選びます。たとえばオーガニックコットン。敏感肌の自分が服を選ぶときは大変です」

以上のことから、衣服の着用と手入れの実践力を高めるには、生徒の振り返りの言葉からもわかるよう問題解決的な学習を意図的・計画的に設定したことは、有効だったと考察する。

(2) 衣服の着用と手入れのチェックリストについて

11月と1月に行った生徒の衣服の着用と手入れのチェックリストを比較した（表5）全ての項目において、「ツールや言葉かけでできる」「一人でできる」項目が増加した。着用では、自分で衣服を選んで購入した経験がないことから身体に合った服のサイズが分からない生徒が5名いた。しかし、サイズを調べる手立てを皆で考え、衣服を身体にあてたり、実際に試着やサイズ表示を見て確認したりする方法が分かったとで、身体に合った衣服を選ぶことができる生徒が増えたと考える。

表5 衣服の着用と手入れのチェックリスト

		A		B		C		D		E		F	
		11月	1月	11月	1月	11月	1月	11月	1月	11月	1月	11月	1月
着用 衣服の手入れ	1 自分の服のサイズが分かり、服を選ぶことができる	○	◎	○	◎	◎	◎	○	◎	△	○	△	△
	2 洗濯機を操作することができる	△	○	△	○	△	○	△	○	△	○	△	△
	3 液体洗剤を目盛りまで計量することができる	△	◎	△	◎	○	◎	△	○	△	○	△	○
	4 手洗いをすることができる（靴下）	○	◎	○	◎	○	◎	○	◎	○	◎	○	◎
	5 干すことができる（タオル・ズボン・Tシャツ）	○	◎	○	◎	○	◎	△	○	○	◎	△	○
	6 たたむことができる（タオル・ズボン・Tシャツ）	○	◎	◎	◎	◎	◎	○	◎	○	◎	○	◎
○一人でできる ○ツールや言葉の指示を受けてできる △教師の支援を受けてできる													

衣服の手入れに関しては、洗濯機操作や手洗いの手順カードの活用をした（図12）。これらの手順カードを生徒が必要に応じて選択し、4回目以降は「手順表なしで大丈夫」と言い一人で衣服の手洗いができるようになった（図13）。継続的に授業の中で靴下の手洗いを行ったことで、全員が一人で手洗いができるようになった。項目5「干す」に関してはうまく干すことができなかった生徒がシワを伸ばして干す手立てを話し合い考え、解決策を発見して干すことできた。また、間隔をあけて干すと風が通り、よく乾き臭わないことにも気づいた生徒がおり、グループにより干し方の工夫も見られた（図14）。これまでの授業と比べ、生徒が主体的に考え活動できる問題解決的な学習は、生徒の意欲や主体性を高めることにも繋がったと考える。生徒が衣服の着用と手入れの方法を探し、思考錯誤して気づき得た知識や技術の習得が、衣服の着用と手入れの実践力が高まったと考察できる。

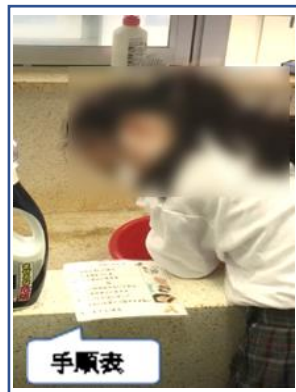
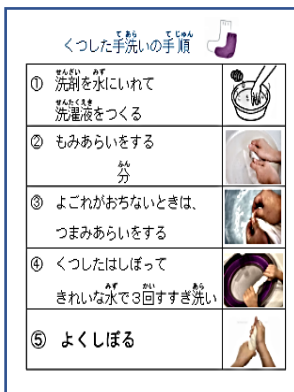


図12 手順表（ツール） 図13 手順表を見て手洗い

図14 衣服を干す学習

(3) 学習に進んで取り組むことの変容

生徒の振り返りシートから（表6）「学習に進んで取り組むことができたか」の項目で、11月に「あまりできなかった」の生徒が2名いた。クラスに 入ることが難しい生徒や授業に参加はするが課題に取り組むことが難しい生徒だったため、話しやすい生徒とペアにし、気持ちが落ち着かない時はいつでも教師に相談するように話し合うことで、安心して授業に取り組めるようになった。1 月には「とてもできた」の項目が増えたことから、進んで取り組めたことが分かる。

表6 学習に進んで取り組むことの変容

学習に進んで取り組むことができたか		
	11月	1月
とてもできた	0	3
できた	4	2
あまりできなかった	2	1
N = 6		

生徒が授業前に「今日は誰とペアかな」「どんな実験するのか」と発言し、楽しみにしている様子も見られた。生徒自身が安心できる環境や生徒同士の関わりを大切にしたこと、また、「問い」を持ち課題解決に向けて、今までは受け身だった授業から生徒が主体的に取り組める体験的な活動を重ねたことで、「学習に対して進んで取り組むことができたか」の項目において肯定的な評価が多くなったと考える。1月に「あまりできなかった」と回答する1名の生徒については、気持ちが落ち着かない要因を本人や関係する教諭と確認して今後、生徒の気持ちに寄り添いながら対応することになった。

仮説2 本人、保護者、学校で共通確認することができる手伝いシートや家庭科便り等の連携ツールを活用することで、生徒が主体的に活動する場面が増え、身につけた力を実生活へ生かすことができるであろう。

2 連携ツールの効果について

(1) 授業における連携ツールの活用

授業で学習したワークシートや学習の様子を記載した家庭科便り、家庭で取り組む手伝いシート(図15)等連携ツールを通して家庭と情報共有を図った。

家庭科便りは計8回発行し、生徒の様子や衣服学習の情報、各家庭で実践した手伝いについて記載した(図16)。毎授業の終わりに、手伝いシートをもとに自分が実践した手伝いを発表する場を設けた。教師が家族からのコメントを読むと、嬉しそうな表情を見せていた。感想から「ありがとうっていわれてうれしかったです」「いろいろなてっだいができてよかったです」「今度はトイレ掃除がんばりたいです」など自信や意欲の高まりに繋がったと考える(図17)。

(2) 生徒・保護者アンケート

生徒アンケートでは、11月には手伝いをしたことがない生徒が2名いたが、1月には頻度は異なるが全員が家庭で手伝いをするようになったことが分かる(図18)。手伝いの内容に関しても11月よりも項目が増え、学校で取り組んだ衣服に関する新しい手伝いも加わった(図19)。手伝いの回数や内容が増えたことは、連携ツールで家庭と情報共有できたことや生徒の頑張りを認められる場面が増えたことが要因である。さらに、学校で級友の手伝い発表を聞いたことで、家庭でも実践できたことが成果に繋がった。手伝いの取り組みに関しては11月には「お母さんのため」と回答していたが、1月には「お母さんのためでもあるが自分のためである」「将来のため」という回答が3人に増え、生徒が将来に結びつけて考えることができるようになったと考察する。

図15 手伝いシート

図16 家庭科便り

図17 手伝いシートの手伝い感想

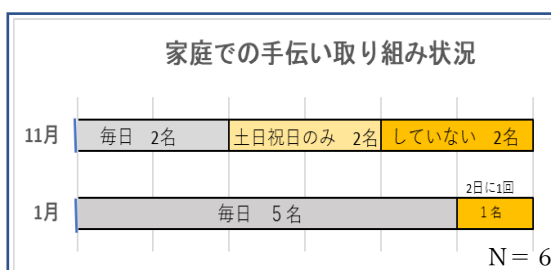


図18 家庭での手伝い取り組み状況

- 【11月】
- ・布団たたみ
 - ・料理
 - ・お箸を持ってくる
 - ・体操服の準備
- 【1月】
- ・タオルたたみ
 - ・靴下洗い
 - ・洗濯物を干す
 - ・洗濯物取り込み
 - ・洗濯たたみ、収納
 - ・上履き洗い
 - ・玄関掃除
 - ・ゴミ出し
 - ・庭掃除
 - ・買い物
 - ・食器洗い、拭き
 - ・ベッドのお世話
 - ・掃除
 - ・部屋の片づけ

図19 手伝いの内容

「家庭での取り組み状況」を11月と1月で比較すると全ての項目において、一人で取り組めるようになった生徒が増えたことが分かる（表7）。家庭科便りから衣服の手入れについての授業の様子を家庭と共有できたことや家族と一緒に協力して生徒のできるところから取り組みを行ったことが良い効果を及ぼしたと考える。また、継続して授業で取り組んだことで靴下の手洗いが一人できるようになり、家庭でも挑戦をした生徒が増えた。今まで家族と一緒に取り組んでいた生徒が保護者の励ましや感謝の言葉を受けることで、意欲や主体性が高まり、一人で取り組む生徒が増えたと捉える。保護者の感想から「冬休みは洗濯物をたたむ、玄関掃除、窓ふきを最後までできた時は『できた』と嬉しそうに満足した様子を見ると成長を感じることができました。今後も洗濯機を使用し干すまで取り組んでやってみたいと思います」など保護者の意識の変容も見られた（図20）。また、母親だけでなく、祖母や姉からの記述もあり、家族が生徒の取り組みに関心を持ち、一緒に共通確認できるツールにもなっていることが分かった。以上のことから、本人、保護者、学校で共通確認することができる連携ツールを活用したことが生徒の主体的な取り組みを促し、実生活に生かすことができたと考察する。

表7 家庭の衣服の手入れの取り組み状況（生徒6名）

アンケート内容	11月		1月	
	家族と一緒に	一人でできた	家族と一緒に	一人でできた
1洗濯機を操作したことがある	2名		1名	1名
2衣服の手洗いをしたことがある	1名	2名		6名(靴下)
3衣服を干したことがある	3名	1名	1名	4名
4衣服を取り込んだことがある	3名		2名	2名
5衣服をたたんだことがある	4名		1名	3名

- ・お手伝いが継続できるよう声かけや意識づけをしていきたいと思います。
- ・以前より素直に進んでお手伝いをしてくれることが多くなりました。
- ・ありがとうや助かったなどの声をかけると、とても喜びお手伝いをまた次もやろうと思うようです。
- ・お手伝いの宿題がでてから、自分から進んでやりたいと言っています。
- ・とても上手になっています。毎日続けられるように「出来る」が増えて嬉しいです。
- ・私よりも力仕事ができることに感謝しています。ゴミ出しは自らカレンダーを見てやってくれ、とても助かっています。
- ・昔はお手伝いしないといけない時代でした。今の時代はお手伝いをする機会が少なくなっています。宿題がでているからやる気がでてきています。家でも声かけしたいと思います。
- ・おばあちゃんと一緒に洗濯物を干していました。来週はアイロンがけにチャレンジします。

図20 保護者からの感想（一部抜粋）

V 成果と課題

1 成果

- (1) 問題解決的な学習を意図的・計画的に行ったことで、級友と対話し様々な考えに触れ試行錯誤し、生徒が意欲的に実践に取り組む姿が見られ、衣服の着用と手入れの実践力を高めることができた。
- (2) 連携ツールを活用することで、本人、護者、学校との連携を図ることができ、生徒が主体的に活動する場面が増え、衣服の着用と手入れの実践力を実生活に生かすことができた。

2 課題

- (1) 地域資源の活用も視野に入れた学習計画を立て、発展的な学習にも取り組む。
- (2) 継続的な取り組みを行うために、小学部・中学部・高等部の教科職員との連携を図り、系統的な指導を行う。

〈参考文献〉

- 沖縄県教育委員会 2022 『「問い」が生まれる授業 サポートガイド 令和4年度版』
- 筒井恭子 2021 『小学校家庭科資質・能力を育む学習指導と評価の工夫』 株式会社東洋館出版社
- 広島県立教育センター特別支援教育 2021 『授業改善！知的障害特別支援学校～プロジェクト型学習の進め方～』
- 大竹美登利 倉持清美 2021 『初等家庭科の研究―指導につなげる専門性の育成』 モリトモ印刷株式会社
- 文部科学省 2018 『特別支援学校教育要領・学習指導要領解説 総則編（幼稚部・小学部・中学部）』 開隆堂
- 文部科学省 2018 『特別支援学校学習指導要領解説 各教科編（小学部・中学部）』 開隆堂
- 梅永雄二 2018 『よくわかる！自閉症スペクトラムのための環境づくり』 株式会社学研プラス
- 文部科学省 2017 『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 技術・家庭編』 開隆堂
- 文部科学省 2017 『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 技術・家庭編』 開隆堂
- 上岡一世 2017 『人生の質を高める！キャリア教育〈家庭生活・学校生活・地域生活・職業生活〉よりよく「生きる・働く」ための授業づくり』 明治図書出版株式会社
- 北俊夫 2015 『知識の構造化を生かす問題解決的な授業づくり社会科指導の見える化＝発問・板書の事例研究』 明治図書出版株式会社
- 鈴木真由子・荒井紀子・綿引伴子 2012 『家庭科における問題解決的な学習の効果と課題―教員に対するインタビュー調査より―』 日本家庭科教育学・例会セミナー研究発表要旨集
- 田邊克彦 2008 『「問題解決能力」育成のためのガイドブック～「習得・活用・探求」への授業づくり～』 神奈川県立総合教育センター
- 藤原義博 2005 『個性を生かす支援ツール知的障害のバリアフリーの挑戦』 明治図書出版株式会社
- 藤義博 2005 『子ども生き活き支援ツールきつとうまくいくよ、移行・連携』 明治図書出版株式会社